

「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし」。これはお念仏の意である。御念仏は報謝の行であるとは知っているが、果して報恩行になつてゐるであらうか。頭だけで法を受取る我々は誠に浅ましい福助である。報恩と言つてもただ頭の中の宗学であり、観念であつて、全我の行ではない。末燈抄の中に御弟子慶信坊の聖人への手紙がのつている。その中に

「仏恩のふかき師主の恩徳のうれしき、報謝のためにただ御名を称ふるばかりにて日の所作とす……わぎといかにしても罷り上りて心しづかにせめては五日御所に候はゞやとねがひ候なり、ああ、こうまで申し候ふも御恩の力なり。」とある。全文念仏の香り、報謝の涙にぬれている。その応信坊の前に私の浅間しすがたが照し出される。念仏は報謝の行と知っているだけ。「身を粉にして骨を砕いて」どこにそんな思いがある。南無阿弥陀仏。頭には沢山なものをつめこんで福助になつて、現実の生活になると、魚が食いたい、肉が食いたい、着物がほしい、名利がほしい、楽がしたい。浅ましい限りである。ただ観念だけの報恩行である。念仏が報恩行だとは、全我が南無阿弥陀仏につゝまれて、身も心も大悲の御恩の中にあつて生かされることではあるまいか。

末燈抄を頂くと、「法然上人は、何時も『浄土宗の人は愚者になりて往生す』と言われ、一文不知の人が参つたのを御覧じては『往生必定すべし』とて笑ませたもうのを見た。しかし文沙汰して賢そうにする人が参つたのを御らんじては『往生はいかがあらんずらん』と確かに承つた」と言つていられる。今でもその通りであらう。土を相手に生きていられる同朋たち、田舎で念仏申していられる同胞たちの間にこそ、美しい妙好人はいられる。往生の一大事を真創に考えて、身柄全体で聞法されるのもこの人たちである。随つて山に野に念仏して、御念仏が全我を動かして報恩行となつてゐるのもこの同胞たちである。学問する者は得るところがあると共に、人間としての尊いものを失うことが多い。学んで愚者になることはむずかしいことである。愚者になりきらねば、御念仏は身心の生きた事実にはならない。

真要抄の中に聖人の御徳を讃えたところがある。その中に「その利益の盛なること田舎辺鄙に及べり、化導の遠く普きは智慧の広きが致すところなり」とある。聖人の御化導が盛であり、遠く末代に及び、広く普くどんな衆生の上にも及ぶのは、智慧が広いからであるといわれるのである。誠に聖人が学者であつたからではなくて、智慧が広いからである。この智慧とは仏智である。人間の智慧才覚位は知れたものである。聖人の偉大は仏智そのままの御念仏にある。愚禿と名告つて一切の殻を破り、素裸の人間となつて仏智虚空界に出ていられるからである。その御己証は地獄一定の愚禿であつても、愚禿の上に生きたもう仏智は広大である。その広大なる仏智そのままの御念仏である。「化導の遠く普きは智慧の広きが致すところなり。」一切衆生さえ

つゝむ仏智である。まして身も心も仏智の外にあらうか。一切衆生をつゝむ仏智が私一人を摂取して下さる。

仏教イソテリはあはれである。おもちゃの本願や、おもちゃの弘誓の船、おもちゃの大作の汽車を名利のために持つて走る。「のせてかならずわたしける」とは凡そ違っている。常に御聖教を手にし法門を学ぶことに一生を贅した私は、沈痛なる内観へとつれこまれる。そしてまたしてもまたしても心引かれるのは、あのただ念仏して生きたもう同胞である。毎日の如く、たどたどしい同胞の御便が私を泣かせる。

念仏の同胞のいない酒の座などで、仏法の話を出す事は智意のない話である。

同胞の集りに一口の御讃嘆の言葉も出ないのは智慧のない話である。

念仏を聞かぬ人は、念仏の話をする嫌うけれども、念仏から出る謙虚さや温さや、徳の光を嫌う人はない。話を出さずに徳を出せ。

「京をあじやう歡喜心（今日を味わふ……）」

なむあみだぶつのなせるしんじん
なむあみだぶつ。

凡夫で聞くぢやない、一凡夫はばけもの
あなたわたしのころにあたる。

わしが阿弥陀になるぢやない
阿弥陀の方からわしになる
なむあみだぶつ。

世界もぐちで、わたしもぐちで、あみだもぐちで
どうでもたすけるぐちのおやさま
なむあみだぶつ。

これは石州の妙好人才市同行の歌である。何という高くも美しい智慧の調べであろう。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」、聖人と信心を一つにする。学識にかけては、京と今日がわからなくても、仏凡一体の智慧の妙境全我なむあみだ仏の一丸、驚くべし驚くべし。

困った人は、今までが悪かった人ではない。教のひゞかない人である。信用の出来る人とは、今までが善良であったという人ではない。今日教がひゞいて全我が教法の如く動く人である。智慧は教から生れる。如来本願の智慧は教えによって転回する心身の上に顕われる。智慧は全我的なものである。

一口ものをいえば正体が露われる。一つ動けば偽らざる相が見える。飾ってもつくろうても、真似の出来ぬが信心の光である。肩の先に傲慢が見え、鼻の先に邪見が表われ、わけて目の中からは体の底の悪心が現われている。しかし、もしその邪見傲慢悪衆生を見せて頂いて、私の全てが悪業煩惱のかたまりであることがわかって、しかもその底に安らぎを得、念仏申させて頂くならば、外からは悪が見えずに仏智が光って見えるであろう。賢い思い、善人意識、仏智をいただいて追い出せ、追い出せ、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」。鼻もちもならぬ悪臭は、善人から出る、賢い人から出る。智慧は愚者の上に光る。